



進言

山梨大学学長

島田 真路



山梨大学病院 特任教授

荒神 裕之

新型コロナで垣間見えた日本の実力

日本の医療水準は世界有数の高さと同様に評価されてきた。国際医学誌ランセットで2017年に発表された医療の質の国際ランキングでは、世界195カ国中、日本は11位と高順位であり、英IDメデイカル社が19年に公表した医療制度ランキングでは、OECD諸国の中で世界一とされた。世界最低水準の周産期死亡率、世界一の平均寿命など、日本の高い医療水準は、国民に多くの恵みをもたらしてきた。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の一連の対応は、日本

の衰退を実感させるのに十分だった。国際的にも最低水準の日本のPCR検査数は、日本の国際的な信頼にも影響した。米国大使館は「PCR検査数が寡少な日本は、感染まん延状況が分からない」として、自国民に退避を促した。安倍晋三首相がPCR検査数の増加を約束した4月上旬以降も、目標の1日当たり2万件に達した日は1日もない。

欧米に比べて極めて低い感染者数、死者数を理由に「ジャパニーズミラクル」と日本の一連の対応を賞賛する声もある。しかしなが

ら、これは東アジア・西太平洋地域に共通した特徴であり、日本の一連の対応の結果とは到底言えない。むしろ、死者数が頭打ちになった東アジア諸国の中で、日本とフィリピンだけが不気味な死者数の増加を続けている。

かつての経済大国は鳴りを潜め、少子化と超高齢社会、産業の空洞化、科学技術力の低下など、日本の衰退を実感させる出来事は枚挙にいとまがない。貧弱なPCR検査体制は、日本の医療体制が世界に後れを取り始めた序章にすぎない。慢心は禁物である。